

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

18世紀パリのフルート曲集に見られる時代的变化

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1999-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/789

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



18世紀パリのフルート曲集に見られる時代的变化

大竹尚之

バロック合奏団の指揮者として有名なパイヤールは又音楽学者として啓蒙的な著作をクセジユ文庫303に残している。その邦題「フランス古典音楽」で17,8世紀フランス音楽芸術の独自性（絶対王制下の理想の追及）は、古典主義対バロックという概念では表現できないと書き始めた。ヴェルサイユで使用された音楽言語、特にその旋律装飾の在り方は「本質的な装飾」として記号により表記され、同時代作曲家に共通するシステムを持っている。又、フランスにおける舞踏に対する固執も組曲（オールドル）構成に見ることが出来る。

さて、1710年代にパリで出版された曲中に、作曲家相互に共通するタイトルが数多く散見される。固有名詞であったり、抽象名詞であったりするそのタイトルは、拍子が異なる場合でさえほぼ同じ旋律を持ち、これも又作品相互に共通したヴェルサイユ内部の慣例のように思われる。題名のなぞ解きは貴族社会のパスタイムだったようだ。ここに、1710年代ヴェルサイユ内部完結型の、独自の bon goût と呼ばれる趣味の世界を見ることが出来る。

しかし、当時全欧的にその名を馳せた天才フルート奏者、作曲家であった Blavet により1744～51年に出版された作品集を見るかぎり、旋律は広くイタリア、フランス、イギリスの当時の有名な舞台作品、鍵盤作品から取られており、かつての自己完結型に見られる bon goût 趣味は散見されず、パロディー化している。20～30年の間にフランス音楽は大きく変化したのである。

17世紀末、18世紀初頭のフルートはオトテール一族の改革によりバロックトラヴェルソとして確立した時期に当たっている。クヴァンツは「フルート奏法」の第一章“横吹きフルートの歴史と簡単な説明”で5節「100年にも充たない以前にフルートの改良がフランスで行われた。それはショームがオーボエに、ボンバルドがバスーンに発達したのと時を同じくしている。」6節「フランスで改良されたトラヴェルソ奏者として、自身の独自の経験をもってして名声を博したのはまずフィリベール Philibert, Rebeille である。その後ラ・バル、ローマのオトテールがくる。その後にブファルダン Buffardin, Pierre Fabriél とブラヴェが来るが、ブラヴェは楽器演奏において先駆者達を大きく凌駕している。」^(注1) これは1752年フリードリッヒ大王下の情報であるが当時のフランスフルート情報を良く伝えている。

さてこれから取り上げる17世紀末ヴェルサイユにおける音楽は大きく3つに分けられて演奏されていた。すなわち宮廷礼拝堂楽団 Musique de la Chapelle, 宮廷室内楽団 Musique de la

Chambre, 宮廷野外音楽隊 Musique de l'écurie である。室内楽団は王の主催する様々な饗宴に音楽を提供したが、その中心は le grand band-24 violons du roi であった。時に Lully, Boesset が総監督で、Chambonières, d'Anglebert, Marais, Forqueray, Hotteterre, Philidor などそうそうたる演奏家が席を同じくしていた。そして悲喜劇の台本提供者として Racine, Molière, Corneille がヴェルサイユに屯していたのである。作品は時に, flûte traversière, flûte à bec, violons, et haut-bois と並記され (曲集タイトル参照) フルート, リコーダー, ヴァイオリン, オーボエ, 高音ヴィオール Dessus de viole autres instruments などの並列表記もしばしば見られた。楽器指定は限定的ではなく選択の余地を残しており, 演奏習慣の存在と共通の音楽言語とでも言うべきものがヴェルサイユ宮の音楽全般を規定していた。今回フルート音楽の変遷を記述するに当たって, 調査をした楽器はフルートのみではない。

フランスのフルート音楽やフルートの図像学的アプローチを行っている Bowers はその博士論文で次のような時代区分を行っている (注2)。

「世紀の初めの25年間はフルート作品に組曲形式が盛んだった時代である。」「1725年以降はソナタが第1の形式になった時期で指導的な作曲家は公開演奏会のスター的ソリストであり, 裕福な生徒にレッスンをし富裕な貴族や市民に雇い入れられた。更に1720年代後半から30年代の最も多作な作曲家二人 (Boismortier, Corrette のこと, 筆者) は, よりマイナーな者もそうであったようにフルート奏者ではなかった。」この宮廷から市街への移動と, 初めはフルート奏者であった作曲家に, 演奏家もまた他の音楽家も作曲家として含まれるようになったことは1740年代を通した等閑には出来ない指標だろう。「この時代以降, フルート音楽の作曲家が減少し, 彼らも自身では奏者では無くなった。」自らの楽器のために書き続けたフルート奏者達は宮廷でよりも市街の音楽仲間で活動を続け, ソナタがフルート音楽の第1の形式として続くことになるのである。作曲家名を羅列する。

- 第一期 la Barre, Hotteterre, 3Philidors-Ann Danican, François Danican, Pierre Danican-, Monteclair, Duke of Orléans
- 第二期 Boismortier, Corrette, Naudot, Braun, Blavet, Caix d'Hervelois, Mondonville
- 第三期 Guillemant, Taillart l'ainé, Lusse

Flûte traversière を初めて曲中に指定した作品を, Flûte と指定された作品から推測することは出来ない。Flûte が多くの場合 à bec すなわちリコーダーをも意味したからである。オペラ作品では

- 1681 Lully “Le Triomphe de l'Amour”
- 1694 Charpentiere “Médée”
- 1697 Destouches “Issé”

1706 Marais “Alcione”

など Flûte を表記している。トリオソナタの場合も同様に、楽器指定はより流動的といえる。

1692 Marais “Pièces en trio pour les flûtes, violons et dessus de viole”

1694 la Barre “Pièces en trio pour les violons, flûtes, et hautbois”

1697 Monteclair “Sérénade en concert”

1700 la Barre “Pièces en trio pour les violons, flûtes, et hautbois”

これらの flûte を指定したトリオ、オペラから、リコーダーかフルートかの選択確定は出来ない^(注3)。la Barre によればルイ太陽王は殊の外フルートを好んだようだ。宮廷野外音楽隊のポストをフルート奏者が占め始め、また貴族の趣味としてアマチュアがフルートを吹きはじめた様子を当時の版画から伺い知ることが出来る^(注4)。

さて、1702年に初めて、flûte traversière と明記した曲集が出版された。この年が私たちの出発点になる。Michel de LA Barre は、“Pièces pour la flûte traversière, avec la basse-continue” 1702 (ファクシミリ版出版譜は1703になっているが、1702年の出版、Bowers)の序文 Avertissement で、「とても気持ちの良い流行の flûte traversière の曲を」「これまでの曲(エアや小曲中心だった)とは性質が違うが flûte traversière に適った曲である」「曲中に難しいことを含んでいる、これは生徒が美しいと思い、吹きたいと願わせ学びたいと思わせるためだ」「私はこの楽器で、マレーがヴィオールで遂げたような完璧の域に近づきたいと願う」とフルートの新しい考え方を提示し、スラー、装飾法、指使いの説明の他、伴奏楽器としてのテオルゴ、クラヴサンの使用をも含めた全く新しい解説を書いている。(本稿p. 65の Avertissement コピー参照)

さてこの la Barre を初めとして Bowers の第1期の作曲家の作品群は組曲で、構成する一曲一曲がタイトルを有している場合が多い。そのタイトルを比較検討しながらフルート作品の時代的変遷を見よう。オールドルの中に数多くのタイトルを付し物語とでも言える組曲を書き上げた Couperin の作品名について研究者の意見を聞こう^(注5)。

肖像 クープランのクラヴサン曲には、宮廷や上流社会の人々の肖像が、その人物の性格を模写する形で数多く含まれている…中略…当時の社交界では音楽を聴く興味の一つに、その組曲が何(誰れ)を表現しているかについて、それを理解することができる洗練されたセンスを競い合う風潮があった。これらはある意味では修辭的伝統の流れをくむものかも知れないが、当時の上流社会で流行していた謎解き趣味が、これらの題名の動機の一つになったとも言えよう。あるタイトルが意味するものを理解し、理解の上で暗黙の了解という共通体験を喜びあう内部完結型の遊び心、それを可能にする共通した背景としての教養と知性、流行への敏感な追従を可能にする社会認識が無ければならない。更に一体型の世界観が存在していたのだろう。Bowers は曲目タイトルを次のように識別した。カッコ内はその例を示す。

同時代人像 (Duc d'Orléans), 神話上の人物 (l'Atalante), 場所 (La Fontainebleau), 居

住地や国, 地方 (L'Italienne, L'Auvergnate), 想像上のもの (Le Lutin), 自然のもの (Le Papillon), 性格描写 (La Fidèle), 感性 (Le Plaignif), 時の記述 (Les Heureux Moments), 出来事 (Le Départ) など^(注6)。

前述の la Barre は1702年の作品に多くのタイトルを付けている。しかし Avertissement の中で「名前は作品の性格とは関係なく, 作曲した場所やそれを喜んでくれた人々からとったものである」と書いている。名前が意味を持たないという la Barre の序文は Couperin 作品の説明とは全く異なっている。正反対と言って良いだろう。しかし Couperin の用いたタイトルと他の作曲家とのタイトル一致が散見され, また同じタイトルで何人もの作曲家が非常に似通った曲を書いているのを見いだすのはなぜなのだろう。曲の性格と名前は無関係であると言う la Barre の作品も他の作曲家と同一タイトルの作品をいくつも持っているのである。

ここで, 全く対立する2つのタイトルについて検討してみよう。

badin,ine 陽気な, 冗談好きな, ひょうきんな, ちょっとふざけた (古) ばかな, 愚かな
 plainte 苦痛, 叫び, 苦情, 嘆くような音 (声) (小学館ロベール仏和辞典)

このタイトルを持つ曲をヴィオール, クラヴサン, フルートの作品に探し, 年代順に並べる。

BADIN/BADINE

Marais	1701	2e livre	IV suite in G 6/8	Gigue la Badin
Marais	1701	2e livre	VI suite in e 6/8	Gigue la Babin
la Barre	1702		suite in D 6/4	Air, le Badin
Marais	1711	3e livre	III suite in F 2	Gavotte la Badine
Couperin	1713	1e livre	5e ordre in A2	Rondeau, légèrement et flate La Badine
Philidor, FD	1716		suite in g 6/8	le Badin
la Barre	1721	7e livre	11e suite in G 2	la Badine (fl duo)
Montclair	1724	1re concert	in e 2	L'Auvergnate, légèrement, Badine
Marais	1725	5e livre	suite in g 2	Rondeau, gay, le Badin
Caix d'Hervelois	1736	5e livre	1e suite in A 2/4	légèrement, la Badine

PLAINTE

Marais	1692	pièces en trio	suite in g 2	Plainte
Marais	1692	pièces en trio	suite in B ^b ♯	Plainte
Hotteterre	1708	1e livre	suite in G 3	Rondeau, tendre, le Plaignif
Marais	1711	3e livre	4e suite in D C	lentement, Plainte

Marais	1711	3e livre	6e suite in g	C	lentement, Plainte
Couperin	1722	14e ordre	in d	♢	très tendrement, Les Fauvêtes Plantives
Monteclair	1724	2e concert	in c	C	tendrement, Plainte
		5e concert	le Canon et la Mousqueterie		
			in d	2	Plainte des blessés

この悲しみ嘆きに対応するタイトルには、違う言葉による表現も使われており同じようにふざけ、冗談に対応するタイトルも異なったものが存在している。(カッコ内作曲家名)

悲しみに対応するタイトル

la Ténébreuse (Couperin), les Regrets (Couperin, Blavet, etc), le Mélancholique (Monteclair)

ふざけに対応するタイトル

le Badinage (Marais, Blavet), la Bagatelle (la Barre, Marais, Caix d'Hervelois), le Lutin (Hotteterre, Blavet)

(これらについても、音楽相互に対照できるが今回は割愛した。)

さて、この *plainte* は作品タイトルのみではなくヴェルサイユ劇作家の言葉として用いられている。今回調べたのは Molière 作品が “L’Ecole des femmes 女房学校”, “Les fourberies de Scapin スカパンの悪だくみ”, “Tartuffe, ou l’imposteur タルチュフ”, “Dom Juan, ou le festin de pierre ドン ジュアン”, “L’Avare 守銭奴”, Racine 作品は “Phèdre フェードル” であるが、調べた範囲の Molière 作品に *plainte* の単語を見いだすことはできなかった。Molière は残念という意味合いで *regret* を使用している。その例を2つ挙げる。“Tartuffe V/6 (第5幕第6場の意味) 3439 (3439行目の意味)” ヴァレール “Avec regret, Monsieur, je viens vous affliger”^(注7) また “Dom Juan, ou le festin de pierre III/6 2091-2092 “ドン ジュアン” Il est assez honneste homme, il en a bien usé, et j’ay regret d’avoir démêlé avec luy.”^(注8) ここにあげた Couperin の *les Regrets* の譜例にわかるように、狭い音域の、繰り返されるパターンを持つ *regret* の旋律は、音楽的に後悔の気分を良く表しているだろう。

(譜例1)

Molière の作中に見られる短いせりふの繰り返しに、似た内容の反復を見て取ることができよう。

Racine の古典悲劇 “Phèdre” には *plaint* という言葉を持つせりふが7回登場している。(II/1, III/2III/5, IV/1, IV/6, V/4, V/6) 1例を挙げる。“Phèdre V/6 2213-2217” テラメ

ール “Cher ami, si mon père un jour désabusé plaint le malheur d’un fils faussement accusé,
Pour apraiser mon sang et mon ombre plantive, Dis-lui qu’avec douceur il traite sa captive,
Qu’il lui rende. . . .” (注9)

ここで *plainte* と題された曲について検討してみよう。Marais は通奏低音を伴ったトリオの組曲として 2 曲 *plainte* を残している。

(譜例 2)

Marais 1692 pièces en trio suite in g 2 Plainte

Marais 1692 pièces en trio suite in B^b ♯ Plainte

ト短調 弱起で始まる旋律が順次進行で下降する動き，それを対位的に追いかける *le dessus* の動き，更に 2 声部で下降する旋律に対して初め半音階的に反行し，その後同じく下降する低音部，それぞれのパートは繋留を重ねながら，セクエンツ的な動きを繰り返す

変口長調 やはり対位的に進行する 2 つの旋律，その上下する順次進行の動き，下降を繰り返すセクエンツ的な低音

(譜例 3)

Hotteterre 1708 1e livre suite in G 3 Rondeau, tendre, le Plaintif

Hotteterre の *le plaintif* は非常に珍しいことに 3 拍子で書かれている。この作品以降 *plaint* には必ず何らかのテンポ及び表情の指示が書き加えられている。それは *tendre*, *lentement*, *très tendre*, *très lentement* などだが，*regret* では Coperin が *languissamment* (3e ordre) を使ったのも特筆されよう。1692年 Marais 作品と比較してまず特徴的なことは，旋律に表された付点の動きである。初めの 8 分音符は次の付点 8 分音符と 16 分音符に対応して 16 分音符扱いにする事も可能だろうが，*très lentement* の表示や *tendre* の要求にはふさわしくないかも知れない。この 3 音で構成される順次進行上向型は時に 4 度，時に 5 度下降し，曲のほとんどをこの音型が支配している。付点を伴ったこの音型には *port de voix* の装飾記号が付されており，さらにこのテーマが毎回次第に複雑になる方向で装飾され，時に 4 個の 32 分音符で書かれるターンにも似た装飾は悲しみの吐息をさえ思わせ，Hotteterre の名曲となっている。

(譜例 4)

Marais 1711 3e livre 4e suite in D C lentement, Plainte

Marais 1711 3e livre 6e suite in g C lentement, Plainte

Marais は 1692 年に *pièces en trio* で *plainte* を書いた後この第 3 集まで *plainte* を書いていない。Hotteterre の 3 年後に出版されたヴィオール曲集の中で久しぶりに見いだしたといえ

badin/ine は役者でもありルイ太陽王の寵児であった Molière 作品には badinage, badinamente と書かれ, badin/iné 表記のものは見いだせなかった。いくつか例を挙げる。“L’Ecole des femmes III/2 1557” (アルノルフの長いせりふで, アニエスに対する結婚の宣告と心構えを述べているところ)。“Le mariage, Agnès, n’est pas un badinage”^(注10), “Les fourberies de Scapin III/2 2575-2579” (スカパンの長い独り芝居, 二人分を演じているところ) スカパン “Ah! Monsieur, gardez-vous-en bien.—Montre-le-moi un peu?, fous, ce que c’être là.—Tout beau! Monsieur.—Quement? tout beau?—Vous n’avez que faire de vouloir voir ce que je porte.—Et moi, je le fouloir foir, moi.—Vous ne le verrez point.—Ah! que de badinamente !”^(注11)

“L’Ecole des femmes III/4 1907” (オラースのせりふ badinage に対してアルノルフが plaisant (ばかばかしい, 滑稽な, 『小学館ロベール仏和』文章の中で, 古風な表現) と答えるところ) オラース “Euh! n’admirez-vous pas plaisant de voir quel personnage. A joué mon jaloux dans tout ce badinage?” アルノルフ “Oui, fort plaisant.”^(注12) “Tartuff, ou l’imposteur” には「くだらない」という意味合いで badinage が使われているが (II/4, I/5), 今回は割愛した。譜面を見よう。

(譜例 7)

Marais	1701	2e livre	IV suite in G 6/8	Gigue la Badine
Marais	1701	2e livre	VI suite in e 6/8	Gigue la Badine

Marais は1686年の第1集ではあまり用いなかった曲目タイトルを第2集から次第に使用を始めるが, フルート作品と重なるタイトルはこの badin と champêtre と数少ない。Marais は初めジークの形で badin を書くけれども, 1711年にはガヴォットで, 1717年には le Badinage というタイトルでガヴォット風のロンドを, 1725年ではロンドの形で badin を, 更に le petit badinage を書いている。ジークは2曲とも分散和音的な跳躍音型を特徴としているが, badin の基調にある諧謔性は明確である。

(譜例 8)

la Barre	1702		suite in D 6/4	Air, le Badin
----------	------	--	----------------	---------------

シチリアーノ風なリズムに統一された, 旋律, 低音のそれぞれの動きは対位的に動いており時に反行しあいながら頻繁な6度の平行を見せている。doux, fort と記された下降するセクエンツは, 前述のフォーブルドンと共に badin の性格を物語っている。

(譜例 9)

Marais	1711	3e livre	III suite in F 2	Gavotte la Badine
--------	------	----------	------------------	-------------------

la Barre に見られた順次進行する3つの音で作られる拍動は (6/4), ガヴォットの場合

には2つの8分音符が隣り合わせた音と2度で動き、特徴的な4つの8分音譜で構成された拍動に変わる。このtwo by twoの動きが2拍子系の全てのbadinに共通した特徴と言える。すなわち Couperin in 2, la Barre in2, Monteclair in2, Marais in 2, Caix d'Hervelois 2/4の場合、in 2では8分音符単位で、in 2/4では16分音符単位でtwo by twoの音型が支配するわけだ。

(譜例10)

Philidor 1716 Suite in g 6/8 le Badin

Phlidor 1716は6/8で書かれているがla Barre 1702 6/4と実によく似た動きを見せている。拍子として考えるとin 2とin 2/4の関係と同じである。くるくると変化する2つの音の組み合わせ、時に順次進行的に4つとなり、時にさ迷い逡巡する2つの音はMolière作品の「滑稽」badinとどこかで結びつかないだろうか。

陽気なおどけた旋律を持つbadinはガヴォットであったりジグであったりと様式的に統一していない。しかし言葉同様、音楽も諧謔的で軽快な動きに支えられている。plainte, badineに統一的な様式はないにせよ、これまで述べたような共通感覚は見落とすことが出来ないだろう。それは旋律的にもリズム的にもフランスフルート音楽初、中期にわたる作曲家の共通言語であるだろう。クリシェーとしてのフランスバロック音楽の特色（クリシェーが音楽の力を弱めるという意味ではなく）は、この同時代、同地域、同職業によって生み出されたものだろう。

ヴェルサイユで活躍した作曲家に共通する音楽言語とでも言うべきものが存在していたわけで、同様に、同じ時期ルイ太陽王14世の下で悲喜劇を提供し続けたRacine, Molièreにもplainte, regretやbadin, badinageなど共通の言語感覚、社会感覚が存在していた。Molièreの劇中のせりふ、文脈で使われた言葉の意味内容、陰喩はフルート作品のタイトルとして音楽を理解する一助として用いられたのだろう。それが閉鎖的かつ自己完結的な世界の存在を伺い知らせてくれるだろう。さて、18世紀初頭の作品タイトルを抜粋し、複数の作曲家に重複するタイトルを探しだす作業を行ったが、その作業をすることにより、そのタイトルを持つ曲が同じ素材を用いた作品であるのか（動物、花、神話、人名等）を類推できよう。以下に複数の作曲家が同じタイトルを用いた、一覧表を作成したが、対象はフルート、クラヴサン (Couperin), ヴィオール (Marais) 曲である。

共通するタイトル一覧（年代のみを記す。末尾のMはMolièreに登場する言葉）

chasse/cor de chasse	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1711/Monteclair 1724	M
l'Angelique	la Barre 1702/Caix d'Hervelois 1726/Couperin 1713/ Dornel 1711	
l'Angloise	la Barre 1702/Marais 1711/Monteclair 1724	

l'Atalante/l'Atalante	Hotteterre 1708/Couperin 1717	
l'Espagnol	la Barre 1702/Marais 1701, 1711/Monteclair 1724	M
l'Henriette	Blavet 1732/Caix d'Hervelois 1726/Dornel 1711	
l'Hirondelle	Dornel 1711/Philidor. FD 1716	
l'Inconstant	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1711	
l'Italienne	Hotteterre 1708/Philidor. FD 1716	
la Badine/le Badin	本文参照	M
la Bagatelle	la Barre 1702/Caix d'Hervelois 1726 Marais 1692, 1725	M
la Boulognoise	Couperin 1717/Monteclair 1724	
la Bournonville	Caix d'Hervelois 1736/Dornel 1711	
la Chauvet	Blavet 1732/Dornel 1711/Hotteterre 1708	
la Coquette/la Coquetterie	la Barre 1702/Couperin 1722	M
la d'Herouville	Blavet 1732/Dornel 1711	
la Fidèle	Hotteterre 1708/Philidor. FD 1716	M
la Fileuse	Couperin 1717/Philidor. FD 1716	
la Florentine	Caix d'Hervelois 1731/Monteclair 1724	
la Folette	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1711	
la Guerre/Bruit de Guerre	Couperin 1717/Monteclair 1724	M
la Mariane/la Marianne	la Barre 1702/Marais 1717	
la Mouche/le Moucheron	Couperin 1717/Philidor. FD 1717	M
la Paisane/la Paysanne	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1725/Philidor. FD 1716	M
la Prinsse de Conty		
la Grâces incomparables ou la Conti	la Barre 1702/Couperin 1722	
la Sauterelle	Caix d'hervelois 1731/Marais 1717/Philidor 1716	
la Tenebreuse/la Ténébreuxse	Couperin 1713/Monteclair 1724	
la Thérèse/l'Amiable Thérèse	la Barre 1702/Philidor. FD 1716/Couperin 1722	
la Trionphante/la Triomphante	Couperin 1717/Dornel 1713	
la Vénètiene/la Vénétienne	Caix d'Hervelois 1731/Monteclair 1724	
la Villageoise	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1701/Philidor. FD 1716	M
le Champêtre	Marais 1701, 1717/Hotteterre 1708	

le Lutin	Blavet 1732/Hotteterre 1708	
le Papillon/les Papillons	Caix d'Hervelois 1731/Couperin 1713 Philidor. AnnD 1712/Philidor. FD 1716/Marais 1692	
le Plaignif/Plainte	本文参照	
le Réveille Matin	Couperin 1713/Monteclair 1725	
les Délices	Couperin 1717/Hotteterre 1708	
les Forgerons	Marais 1725/Philidor. AnnD 1712	
les Ondes	Couperin 1713/Monteclair 1724	M
les Regrets	Blavet 1732/Couperin 1713	M
les Tourterelles	Hotteterre 1712/Monteclair 1724	M
Rossignol/le Rossignol	Caix d'Hervelois 1726/Marais 1722	
Sommeil	Monteclair 1724, 1725	M

上記のタイトルを全て当たるのは紙面の都合上出来ないが、sommeil と tourterelle を見ておく。sommeil は Lully “Atys”, Destouches “Issé”, Rameau “Dardanes” などの舞台作品に登場し、Monteclair や Blavet にも見られるタイトルである。半音進行、3度内で上下行する旋律音型、低音との対位法的な動きはこの曲に特徴的なもので、lentement, doucement, tendrement は欠かせないものだろう。例を挙げる。“Tartuffe, ou l'imposteur I/4 413” (召使のドリーヌが、タルチュフに騙されている主人のオルゴンに伝えるせりふ) ドリーヌ “pressé d'un sommeil agréable, il passa dans sa chambre au sortir de la table, et dans son lit bien chaud il se mit tout soudain, Oû sans trouble il dort jusques au lendemain.”^(注13)

papillon (蝶), l'hirondelle (ツバメ), la mouche (ハエ), la sauterelle (バッタ) など動物をタイトルにし、その特徴的な動きを旋律に模倣したものも興味深い。tourterelle (キジバト) は跳躍のあとに順次進行が続く旋律を持ち、2本のフルートのための曲であるが、やはり“Tartuffe”でのオルゴンのせりふに“Ensemble vous vivez, dans vos ardeurs fidèles; Comme deux vrais enfants, comme deux tourterelles”^(注14)とありフルートの対位法的な動きはこの Molière 記述と見事に共通する背景を持っていると言えるだろう。

このようなタイトルスタディを通したヴェルサイユ内部を中心とした自己完結的な世界は、1730年代すなわち Blavet の時代を経て大きく変わって行く。タイトルはまだ Blavet などが用いるが、出版される多くの曲集は Sonata と表記され更に、1720年代後半からはイタリア様式によりコンチェルトが書かれ始める (Bowers p. 172~187)。Blavet に見られる変化は特筆されるもので、パリでの演奏活動のかたわら、教育的な意味でも編纂された3巻の Recueil (1744, 1755 vol. I/II 2nd edition, 1757 vol. III 2nd edition Jean-Saint Arroman, Fuzeau 66) は収められた曲のほとんどが他の作曲家の作品によるパロディ編曲によって占められた内容になっている。タイトルは全て舞曲名、エアー名、オペラアリア名となっている。

Blavet 自身の曲は以下の通りであるが、その数の少なさに驚く。

- vol. 1 Gavotte 7, Menuete 68, 73, Gigue 72, l'Insinuate 76, Marche 7, Menuete en Rondeau 34, Prelude 1, Rondeau 10, 80 (数字はページ番号) (全69曲中)
- vol. 2 Prelude 1, Rondeau 48 (全71曲中)
- vol. 3 Prelude 1 (全99曲中)

Blavet が収録した自分以外の作曲家は次の通りである。

- vol. 1 Blamont, Corelli, Couperin, Cupis, Destouches, Handel, Monteclair, Rameau, Royer
- vol. 2 Destouches, Farinelli, Francoeurt, Geminiani, Handel, Martini, Rameau
- vol. 3 Blamont, Bury, Couperin, Destouches, Francoeur, Handel, Marais, Mondonville, Mouret, Rameau, Rousseau, Royer, Telemann

収録作品の中にイタリア、イギリス、ドイツの作曲家を含むということは、当時のパリの音楽状況がかったようなヴェルサイユ中心では無く、宮廷音楽自体の流失、遺漏といったおもむきから、富裕な市民層、貴族を中心としたコスモポリタンな、流動的なものに変化していったことを物語っていよう。かつての自己完結的な閉鎖された音楽及び文化状況は大きく変化し、Boismortier, Naudot を初めとする多産な作曲家により、作品が広く市民層に広がり、技術的にも Blave を中心に高度のテクニクを得るようになっていたと考えられる。しかしこのようなフルート音楽を中心とした18世紀中期フランスの音楽における民主化、広汎化と言った現象は1750年を過ぎるにつれて、装飾過多な疲弊した音楽とも言える好事家的世界へと進み、フルート作品は新しく生まれてこなくなるのである。(Bowers 277~289)

注1 “On Playing the Flute” Chapter 1, section 5, 6/Johann Joachim Quantz,
translated by Edward R. Reilly, Faber and Faber, 1966

注2 “The French Flute School from 1700 to 1760” Chapter II, The French Flute School from 1700 to 1760: Composers, Performers, and Concerts p. 37~39

Jane Meredith Bowers, University of California, Berkeley, Ph. D., 1971 University Micro Films

注3 ibid.; Chapter I The Early History of the Flute in France and its Rise to Prominence in the late seventeenth century p. 13~36

注4 ibid. p. 20

注5 『新版クーランその家系と芸術』 p. 225~244, 松前紀男, 音楽之友社, 1997

注6 Bowers p. 105~106

注7 ヴァレール「まことにお気の毒ですが、悪い知らせを持ってまいりました。」タルチュフ第5幕第6場 モリエール全集2 p. 269, 鈴木力衛訳, 中央公論社, 1973

注8 ドン ジュアン「なかなか立派な男だ。あっぱれなふるまいだった。あと仲違いしたのは残念千万」ドン ジュアン第3幕第6場 モリエール全集1 p. 124

注9 テラメヌ「いつか父上が誤りに気付かれて、おとしいれた王子の不幸をなげかれるなら、私の血となげきかなしむ霊をとむらうために、やさしくアリシー姫をあつかってほしいと父上にねがってほしい」フェードル 第5幕第6場 戸張智雄訳 世界文学全集11 p. 338, 講談社,

1978

- 注10 アルノルフ「アニエスや、結婚というものは冗談ごとではない」女房学校 第3幕第2場
モリエール全集2 p.135
- 注11 スカパン（独り芝居）「ちょっくら見せてくれい、なにがあるだか」いけませんよ、だんな。
「なにい！ いけんと？」わたしの持っているものを見たって仕方がないじゃありませんか。「ところが、わすは見てえだ、わすは」見せるもんですか。「こいつ、ふざけたことを言うでねえ」着物ですよ、わたしの” スカパンの悪だくみ 第3幕第2場 モリエール全集3 p.358
- 注12 オラース「ええ！ この機転に感心なさらないのでですか？ この笑劇のなかで、あのやきもちおやじの演じた役割が滑稽だとは思いませんか？ いかがですか」アルノルフ「さよう、じつに滑稽ですな」女房学校 第3幕第4場 モリエール全集2 p.143
- 注13 ドリーヌ「(タルチュフは) 気持ちよさそうにうとうとして、食卓を離れるとすぐ部屋に引き取って、暖いベッドにもぐりこんで、朝までぐっすりお休みになりました」タルチュフ 第1幕第4場 モリエール全集2 p.196
- 注14 オルゴン「おまえたちは、信仰の炎に燃えながら、ふたりの子供のように、二羽のキジ鳩のように、仲よく暮らすのだ」タルチュフ 第2幕第2場 モリエール全集2 p.209

今回参照した作品リスト（アルファベット順）

Michel Blavet

Sonates mêlées de pièces pour la flûte traversière avec la basse oeuvre 2	1732
3e livre des Sonates pour la flûte traversière avec la basse	1740
1re Oeuvre contenant 6 Sonates a deux flûte traversière sans basse	1741
1re Recueil de Pièces petits Airs Brunettes Menuetes & c avec des doubles et variations accomode pour les flûte traversière, violons, pardessus de viole & c	1744/1755
2e Recueil de pièces	1744/1755
3e Recueil de pièces	1755

Joseph Bodin de Boismortier

Sonates en trios pour trios flûtes traversières sans basse	1725
Sonates en trio pour les flûtes traversières, violons, ou haubois, avec la basse	1726
Sonates pour la flûte traversière avec la basse	1727
22e Oeuvre, Diverses pièces pour une flûte traversière seule	1728

Braun 6 Sonates en trio pour 2 flûtes traversières, violons ou hautbois avec la basse 1728

Louis de Caix d'Hervelois

Pièces pour la flûte traversière 1re recueil	1726
2e Recueil de Pièces pour la flûte traversière, avec la Basse	1731
4 Suites pour la flûte traversière 3e recueil 6e oeuvre	1736

François Couperin

1re livre de Pièces de Clavecin 1, 2, 3, 4, 5 Ordre	1713
2e livre // 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 Ordre	1717
3e livre // 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19 Ordre	1722

Concerts Royaux	1722
Les Goûts Reunis	1724
Apothéose de Corelli	1724
Apothéose de Lully	1725
Les Nations	1726
	manuscript de Lyon
	manuscript de Paris
4e livre de pièces de Clavecin 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27 Ordre	1730
Joseph Chabanceau de la Barre	
Air a deux Parties avec les seconds couples en diminution	1669
Michel de la Barre	
Pièces pour la flûte traversière avec la basse continue	1702
3e livre des Trio pour les violons, flûtes, et hautbois melez de Sonates pour la flûte traversière	1707
1re livre de pièces pour la flûte traversière (2e livre)	1710
Michel de la Barre (contn.)	
2e livre de pièces pour la flûte traversière avec la basse continue	1710
1re Suitte de pièces a deux flûte traversières	1709
2e Suitte //	1710
3e Suitte //	1711
4e Suitte //	1711
5e Suitte //	1713
6e Suitte //	1714
7e Suitte //	1721
8e Suitte //	1721
9e Suitte //	1722
10e Suitte //	1722
12 Suitte //	1725
8e livre contenant 2 Suites pour la flûte traversière avec la basse	1722
Antoine Dornel	
Sonates a violon seul et Suites pour la flûte traversière avec la basse, oeuvre 2nd	1711
Sonates en trio pour les flûtes allemandes, violons, hautbois & c, oeuvre 3e	1713
Jacques Hotteterre, le Romain	
Pièces pour la flûte traversière, et autres instruments avec la basse-continue livre 1re, oeuvre 2nd	1708
(1er Livre de pièces, oeuvre 2nd,nouvelle edition) 1715	
Sonates en trio pour les flûtes traversières, flûtes à bec, violons, hautbois, & c oeuvre 3e	1712

1re Suite de pièces a deux dessus, sans basse continue, pour les flûte traversières, flûte à bec, violons, etc, 4e oeuvre	1712
2e Livre de pièces pour la flûte traversière et autres instruments, avec la basse, oeuvre 5e	1715
L'Art de preluder sur la flûte traversière, sur la flûte-à-bec, sur le hautbois, et autres instrumens de dessus, oeuvre 7e	1719
Jean-Marie Leclair	
Sonates pour le violon et pour la flûte traversière avec le basse continue, 1re edition	1728
„ 2d livre (2e edition)	1743
Marin Marais	
Pièces de viole, 1er livre	1686
„ (bass part only)	1689
Pièces en trio pour les flûtes, violon, dessus de viole 1692	
Pièces de viole, 2d lievre	1701
„ , 3e lievre	1711
„ , 4e lievre	1717
„ , 5e lievre	1725
Michel Pignolet de Monteclair	
Concerts pour la flûte traversière avec la basse chifree	
1er/2e/3e/4e/5e concert	1724
6e concert, la paix	1725
Jacques-Christophe Naudot	
Sonates en trio pour 2 flûtes traversières avec la basse	1726
Anne Danican Philidor/Philidor fils aine	
1er livre de pièces pour la flûte traversière, flûte à bec, violons, et haut-bois avec la basse continue	1712
François Danican Philidor	
Pièces pour la flûte traversière. qui peuvent aussi se jouer sur le violon, 1er livre	1716
François-Andre Danican Philidor	
L'Art de la modulation a quatuors pour un hautbois, deux violons et basse	1755
Pierre Danican Philidor	
1er Oeuvre contenant 3 suites a 2 flûtes traversières avec 3 autres suites, dessus et basse, pour le hautbois, flûte, violons, & c	1717


2e Oeuvre	2 suites (a 2 fl)	
	2 suites, dessus et basse	1718
3e Oeuvre	1 suite (a 2 fl)	
	1 suite, dessus et basse	1718
Trio 1er oeuvre contenant 6 suites, hautbois et flûte		?
Sonates en trio pour 2 flûtes traversières avec la basse		?

あとがき

この作曲家相互のタイトル重複にヒントを得た小論は、現在のファクシミリ出版の普及によって初めて可能だった気がする。かつて、学生時代留学中にブリュッセルやパリのコンセルヴァトリーを訪ねて譜面をコピーしたあの苦労を考えると隔世の感がある。更に今回は取り上げなかったものの一つに、18世紀の辞書類に問題の言葉がどのように登場しているか調べたものがある。このような調査を可能にしたのはインターネットのおかげであり、各ホームページへの感謝の念は表現仕様がなほ大きい。特にモリエール、ラシーヌを初め現代に至るまでの作家と作品を網羅し、サーチ機能をフルに使わせて下さった <http://cedric.cnam.fr/ABU/BIB/auteurs/> に感謝申し上げます。

(本学講師＝リコーダー担当)

AVERTISSEMENT.

 Les Pièces sont pour la plus grande partie d'un Caractere si singulier & si différentes de l'idée qu'on a eüe jusques icy, de celles qui conviennent à la Flute Traversière, que j'avois résolu de ne leur faire voir le jour qu'en les executant moy-même; Mais les sollicitations de ceux qui me les ont entendu jouer, & les fautes qui se sont glissées dans les Copies de celles qu'on m'a surprises, m'ont enfin déterminé à les faire Imprimer; Et comme ces Pièces sont les premières qui ayent paru pour cette sorte de Flute, je croy être obligé pour en donner l'intelligence, de dire à ceux qui les voudront jouer :

Que lorsqu'on trouvera deux ou plusieurs Croches, soit en montant ou en descendant, auxquelles il y aura une liaison semblable à celle dont on se sert pour marquer les syncopes, on les passera toutes d'un seul coup de langue, quand même elles ne seroient pas attachées ensemble; & par la même raison, on donnera des coups de langue à toutes les Croches attachées ensemble ou non, s'il n'y a pas de liaison dessus ou dessous, telle que celle dont je viens de parler.

Lorsqu'on trouvera deux Notes, soit Noires ou Croches, par degré disjoint, auxquelles il y aura une liaison, on donnera un coup de langue à la Note supérieure, & on tombera sur l'inférieure, sans donner de coup de langue, & sans exprimer l'intervalle.

Lorsqu'on trouvera la même chose en montant, on donnera le coup de langue sur la Note inférieure, & on passera à la supérieure sans coup de langue & sans exprimer l'intervalle.

Lorsqu'il se rencontrera deux Noires par degré conjoint en montant, auxquelles il y aura une liaison, on donnera un coup de langue sur la première, & on coulera la seconde avec un battement qui se fera du même doigt qu'on sera obligé de lever.

Lorsqu'on trouvera deux Noires par degré conjoint en descendant, auxquelles il y aura une liaison, on donnera un coup de langue sur la première, & l'on tremblera sur la seconde sans coup de langue.

On fera la même chose aux Croches en pareille occasion, si le mouvement le permet.

On aura soin aussi de faire les Tremblements marquez par une Croix.

Cette Croix placée à côté d'un Chiffre à la Basse-Continué, tiendra lieu d'un Diéze à l'Accord.

Voilà à peu près tout ce que l'on doit observer pour jouer ces Pièces. A l'égard de l'Etendue, il y a deux, ou trois Tons, dont je crois que l'on n'a point de connoissance, & je ne sçauois les faire entendre par écrit; Mais ceux qui voudront les apprendre, pourront se donner la peine de passer chez moy; s'ils sont à portée de le faire, je me feray un plaisir de les leur montrer sans intérêt. Ces Tons sont *l'E, Si, Mi* plein, & *le D, La, Re*, Diéze en haut; Pour *le C, Sol, Ut*, Diéze en bas; Il se fait en tournant l'embouchure de la Flute en dedans. On peut jouer seul la plus grande partie de ces Pièces. Lorsqu'on voudra le faire en Partie, il faudra prendre absolument une Basse de Viole, & un Théorbe ou un Clavecin, ou les deux ensemble; mais je crois que le Théorbe est à préférer au Clavecin: car il me semble que le son des cordes-à-boyau convient mieux avec le son de la Flute Traversière, que celui des cordes-de-laton. Je crois encore être obligé de dire, que je n'ay donné des noms à ces Pièces, que parce qu'il y en a plusieurs de la même espèce, & que j'ay tiré ces noms ou des Personnes à qui elles ont eü le bonheur de plaire, ou des endroits où je les ay faites, sans prétendre par ces noms marquer leur Caractere en aucune maniere. Enfin, j'ay affecté de faire entrer dans ces Pièces une partie des beautés & des difficultés, dont cet Instrument est susceptible, pour engager ceux qui les voudront executer à étudier assez pour y parvenir. Et pour approcher autant qu'il est possible, cet Instrument de sa perfection, j'ay crü pour la gloire de ma Flute & pour la mienne propre, devoir suivre en cela Monsieur Marais, qui s'est donné tant de peines & de soins pour la perfection de la Viole, & qui y a si heureusement réussi.



譜例 1

Les Regrets.
Languissamment.

A musical score for 'Les Regrets' in C major, 3/4 time. It consists of two systems of two staves each. The first system is labeled 'Les Regrets' and 'Languissamment'. The music features a melodic line in the upper staff and a bass line in the lower staff, with various ornaments and slurs. The second system continues the piece with similar notation.

譜例 2

Plainte

A musical score for 'Plainte' in B-flat major, 2/4 time. It consists of three systems of two staves each. The first system is labeled 'Plainte'. The music features a melodic line in the upper staff and a bass line in the lower staff. The second system includes a triplet in the upper staff and ends with a measure number '39'. The third system continues the piece and ends with a measure number '43'. The score includes various ornaments and slurs.

Handwritten musical notation for two staves. The top staff has a treble clef and the bottom staff has a bass clef. The music includes various notes, rests, and ornaments. Fingerings are indicated by numbers 1-5. Ornaments are marked with asterisks and some have specific rhythmic values like 7/8 and 6/4. The piece ends with a double bar line and a fermata. The number 39 is written at the end of the top staff.

78
Plainte

Handwritten musical notation for a single staff with a treble clef. The music consists of a series of notes with a melodic contour. A fermata is placed over the final note. The number 78 is written at the beginning.

78
Plainte

Handwritten musical notation for two staves with a treble clef. The top staff has a melodic line with a fermata, and the bottom staff provides a harmonic accompaniment. The number 78 is written at the beginning.

78
Plainte

Handwritten musical notation for two staves with a bass clef. The top staff has a melodic line with a fermata, and the bottom staff provides a harmonic accompaniment. The number 78 is written at the beginning.

譜例 3

36 PIÈCES POUR LA FLÛTE TRAVERSIÈRE,

Tres Lentement.

Handwritten musical notation for two staves. The top staff is for the Flute and the bottom staff is for the Bass Continuo. The music is in 3/4 time and features a slow, melodic line. The piece is titled "RONDEAU Tendre. Le Plaintif." and includes various ornaments and fingerings. The number 36 is written at the beginning.

RONDEAU Tendre. *Le Plaintif.*

BASSE-CONTINUE.

BASSE-CONTINUE.

譜例 4

Plainte
55
Lentement

Plainte
55

Plainte
86
Lentement

Plainte.
86.
Lentement.

譜例 5

Les Fauvètes Plaintives

Très tendrement

This musical score consists of four staves. The top two staves are for the vocal line, with the instruction 'Très tendrement' written below them. The bottom two staves are for the piano accompaniment. The music is written in a minor key and features a melodic line with many slurs and ornaments, and a bass line with chords and moving lines.

譜例 6

2^e Concert Dessus & Basse.

Tendrement.

Plainte.

Volle.

Clavecin.

This musical score consists of two systems of two staves each. The first system is for the vocal line, with the instruction 'Tendrement.' above it and 'Plainte.' below it. The second system is for the keyboard accompaniment, with the instruction 'Volle.' above it and 'Clavecin.' below it. The music is written in a minor key and features a melodic line with many slurs and ornaments, and a bass line with chords and moving lines. There are some numerical markings (3, 5, 6, 7) under the notes in the first system.

Plainte des blessés.
Lentement.

Musical score for 'Plainte des blessés'. The piece is marked 'Lentement.' (Ad libitum). It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The key signature has one sharp (F#). The melody is written in the treble clef, and the bass line is in the bass clef. There are some fingerings indicated, such as '2', '6', and '7 6'. The piece ends with a double bar line and a repeat sign.

La Mousqueterie.
Vite.

Musical score for 'La Mousqueterie'. The piece is marked 'Vite.' (Allegretto). It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The key signature has one sharp (F#). The melody is written in the treble clef, and the bass line is in the bass clef. There are some fingerings indicated, such as '7 6', '4 3', and '4'. The piece ends with a double bar line and a repeat sign.

譜例 7

Gigue la badine!
123

Musical score for 'Gigue la badine!'. The piece is in 6/8 time. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The key signature has one sharp (F#). The melody is written in the treble clef, and the bass line is in the bass clef. There are some fingerings indicated, such as '4', '2', and '3'. The piece ends with a double bar line and a repeat sign.

Gigue la Badine.
73

Musical score for 'Gigue la Badine'. The piece is in 6/8 time. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The key signature has one sharp (F#). The melody is written in the treble clef, and the bass line is in the bass clef. There are some fingerings indicated, such as '6', '5 9', '7 6', '7 6', '7', '8', and '7 3'. The piece ends with a double bar line and a repeat sign.

譜例 8

PIECES POUR LA FLUTE TRAVERSIERE.

LE BADIN.

Musical score for 'LE BADIN.'. The piece is in 6/8 time. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The key signature has one sharp (F#). The melody is written in the treble clef, and the bass line is in the bass clef. There are some fingerings indicated, such as '6', '4', '6', '6', '5 4', '6', '6', '6', '6', '7 7'. The piece ends with a double bar line and a repeat sign.

BASSE-CONTINUE.

譜例 9

Gavotte
la badine 32.

Gavotte
la badine.
32.

8 **PIECES POUR LA FLUTE TRAVERSIERE;**
LE B A D I N.

VIOLON OU FLUTE.

The image shows a musical score for a piece titled "LE B A D I N." from a collection of "PIECES POUR LA FLUTE TRAVERSIERE". The score is written for Violon ou Flute. It consists of two staves. The top staff is in treble clef with a key signature of one flat (B-flat) and a time signature of 6/8. The bottom staff is in bass clef with the same key signature and time signature. The music features a melodic line with various ornaments and fingerings. Fingerings are indicated by numbers 1-7 and *6. There are also asterisks and plus signs above some notes, likely indicating specific performance techniques or ornaments. The piece concludes with a double bar line and a repeat sign.